

資料整理の思い出―終わりのはじめり―



田中宏巳

平成二十五年度末で帝京大学を去るが、奇しくもこの秋から、国会図書館の手で米議会図書館 (Library of Congress)、以後LCとする) が所蔵する旧陸海軍接收資料のデジタル化がはじまった。資料の整理に着手してから実に二十三年、今年度卒業生諸君の年齢とほぼ同じ年月である。六千点近い資料は、かなり分厚いものもあるので、デジタル化には一年以上、二年くらいかかるかもしれない。この資料群には名称はついていないが、「タナカが整理した資料」と関係者間では呼ばれているらしい。

「タナカ」というのは私のことである。一九九〇年に五ヶ月間、九一年に二ヶ月間、九三年に一ヶ月間、九五年に二週間、つぎはぎのように時間をつくってはワシントンを訪ね、LC内で資料を探し、見付けては集め、整理・修繕しながらリスト化したものだ。九〇年こそ国の出張旅費で出掛けたものの、何を間違えたのか片道の航空運賃しかもたえず、生活費も自分持ちであった。これ以降の飛行機代・生活費はすべて自費、それでも、行かせてもらえるだけ有り難いと思え、といったニュアンスの言葉を浴びせられた。海軍の私費留学制度で留学した秋山真之や井出謙治の方が、国費留学生より頑張ったといわれるが、私も無意識に一分一秒も無駄にすまいと仕事をした。

LCは三つのビルディングからなり、蔵書数だけで二八〇〇万冊以上（一九九〇年時点）、当時、マディソンビルにあったアジア部日本課が管理する日本語図書だけでも七十万冊を越えていた。私が追跡したのは、敗戦直後、WDC (Washington Document Center) によって日本国内で接収された四十五万点といわれた陸海軍資料の行方である。六七年（昭和三十二）に三万点ほどが返還され、防衛庁戦史室に収められたが、まだ計算上、四十万点以上がアメリカ国内に残っているはずで、その多くがLCに移管されたいことがわかっていた。しかしそれとおぼしき資料が見つかったという噂もなかった。

ワシントンに近いリッチモンド大学のエバンス教授を頼って渡米、九〇年六月半ばのことである。当時はワシントンまでの直行便がなく、デトロイトで乗り換えてワシントンに入った。なおその年の十一月に帰国したが、その直前に全日空がワシントン路線を開設したばかりで、大きなジャンボ機のエコノミーに十数名の乗客しか見えず、まるでジャンボを貸し切ったような気分を味わうことができた。

マディソンビルは閉架式図書館で、図書はすべて書庫の中に収められている。どこでもそうだが部外者が書庫に入ることは禁止されている。目指す図書が日本課の管理する書庫内にあるはずと決めてかかっていた私は、最初の三ヶ月間ほどは、図書カードをめくっては当たりをつけ、一般閲覧者同様に請求を繰り返しては一冊、二冊と出してもらい、目指す接収図書が確かめる作業を続けた。

四ヶ月目に入ったころ、科学部の方からマイクロフィルムのチェックをしてくれないかと頼まれ、何のマイクロカも確かめもせず引き受けた。マイクロフィルムは三四〇リールもあり、すべて日独の軍用機の開発・試製・実験等のデータ、研究論文などであった。ドイツ語がよくわからない上に、全リールのリスト化に手をつけると、帰国までこの仕事以外でなくなることをおそれ、日本関係リールの点検だけに止らした。日本関係はわずかに三四リールで、この数字はそのまま日本の航空機開発の現状を反映し、さらに日独資料の内容を比較すると、日本の後進性はつきりしてくる。日本の資料は、基礎研究レベルのものが圧倒的に多く、実用段階の機種数が非常に少ない上に実用化試験のデータが幾らもない。これに対してドイツ資料は、実用段階の機種数が日本の十倍はあろうか、実用化試験のデータが大部分を占めている。資料の数量と内容が、そのまま両国の航空機の発展段階を表していると考えるのは性急過ぎるかもしれないが、大きくはずれていないことは疑いない。

このマイクロフィルムを作製したのは、オハイオ州デートンの Air Document Division, T-2, Headquarters Air Material Command (米陸軍航空隊航空補給軍司令部航空情報部航空文書課) で、撮影に失敗した箇所及び編集者が不必要とした箇所を切り取り、接着テープで繋ぎ合わせる編集をしてあった。フィルムをマイクロローダーにかけて回すと、頻繁に接着テープで繋いだ箇所が老化のためブスツと切れる。やむなく修理用フィルムで修復す

る作業をしながらリスト化をはじめたが、一日に一リールを仕上げるのが精一杯であった。不器用な私が修理したフィルムが使い物になったのか心配したが、何とか使用に耐えているらしい。

リストは、薄い紙を使うアメリカ式レポート用紙で六百枚以上に上ったと記憶している。原本は私が持ち帰り、LCにコピーを置いてきたが、それがどのように使われたのか知らなかった。数年前、久方ぶりで国会図書館憲政資料室に顔を出した際、書架に並んでいる閲覧用目録の中に、かなり分厚い「German-Japanese Air Technical Document」上・下巻が目に入った。何だろうと開けてみると、手書きの解説とリストのコピーを製本化したものであった。すぐに自分の字だとは気付かず、解説の文章を読んでやっと自分のものだと確信した。二十年以上前の殴り書きだが、今日のものより断然うまい。ワープロが原因だとはいわないが、以前に比べて手書きしなくなったことは確かだ。私の手元にあるはずの原本は、他の貴重資料と共に盗難に遭い存在しない。

この仕事を終えたあと、LC側の対応が急に変わった。アジア部長から、書庫に入り資料を探してもよいという許可が下り、晴れて書庫内に入れることになったが、帰国までにあと二十日ほどしか残っていなかった。アジア部の書庫の中で日本課が管理する書庫がもつとも広く、確かマディソンビルの三階書庫を全部使っていた。

天にも昇るような気分で大なる書庫を端から端まで歩いて見た。広い。書庫内は暗く、人が近づくと近くの列の照明がつき、去ると間もなく消える仕組みである。天井には消火用真鍮製水道管が縦横に走り、各所に散水用の蛇口と火災報知器が見える。火事を感じると自動的に水が出るが、水のため図書が確実に駄目になるシステムである。火災報知器は十日に一回ぐらいの割合で誤作動し、その都度、館内にいる全員が外に強制的に出され、一時間か一時間半、外で時間をつぶすほかなかった。

書庫内を歩いてみると、分類番号のラベルのないもの、無造作に横積みしてあるものなどが目に入る。その中から、WDCの下請けをしたATIS（連合軍翻訳通訳局）が東大図書館や赤羽の補給廠で添附した伝票のついたままのものがあちこちで見つかった。ようやく巡り合うことができたのである。どのくらいあるか見当がつかなかったが、運び込む専用の書架を確保するため、ラベルの張つてある図書を移動させた。私が司書の仕事を体験した最初である。ステイール製の書架一本は日本のそれと大差なく、高さが二〇〇センチ程、幅が七四センチ程であろうか、二十二本ほど使わせてもらうことにした。

広い書庫は、長さも幅もわからない。しかしマデイソンビルは、外から見るとさほど大きく感じない。隣接のビルとの距離が近く比較しやすい日本と違って、アメリカの建物は周囲との距離を十分にとっているため小さく感じる。本を載せるカートを押して、一日中、書庫内を端から端まで何往復もし、未整理図書を見付けると片っ端から開き、WDC接收資料とわかるとカートに積み込み、「私の」書架に運び込む。帰国する一週間前まで、こんな仕事ばかり続け、十日ほどで全書架を一杯にした。

それから猛然とリスト化に作業に取り掛かったが、資料の痛みがひどいものが多く、中性紙の保存用封筒に一点ずつ入れ、損傷具合によっては簡易修理を施した。そのため、どんなに頑張っても一日に二十五〜三十点をリストできればいい方であった。氷山の一角をリスト化しただけで、翌年再び来る約束をして帰国した。

九一年二月後半、大学の成績をつけ終えると、再びワシントンに舞い戻った。遠くて狭いアパート暮らしの前年と違って、今度はLCに勤める方の三階建タウンハウスを一人で使わせてもらうリッチな生活、LCまで徒歩九、十分の近さである。着いてすぐは寒かったが、間もなく春到来、通勤途中の家々の庭にチューリップやスマイレな

どの花がつつぎ咲き出し、三月末になると市内各地の桜が一斉に咲き出した。日本ではポトマック河畔の桜が知られているが、桜は市内のどこにもある。空気が暖かい春の宵を「家路」につく時の浮き浮きした気分は忘れられない。四月になるとイラクに派遣された兵士たちが帰国し、凱旋パレードが何度も行われた。こんな機会はまだとないから何度か見物したが、誰もフセインが復活するとは思わなかったにちがいない。

リスト化を続ける陸海軍資料は広範囲にわたり、日本にないものが相当数ある。書誌学的調査をテーマにしている関係上、WDCを介し日本からLCに入るまでの経緯・経路を明らかにするため、ワシントン南方のアレキサンドリアにあったWDC図書館からLCに移管された経緯に特に注意した。だが管理する日本課には図書・資料の転出入に関する記録はほとんど残されていなかった。こういう問題は国立公文書館に行つて調べると忠告され、当時の国立公文書館は比較的近く、夜九時まで開館していたので、LCでの作業を終えたあと行つてみたが、キーワードが当たっていなかったため、一度もヒットしなかった。WDC図書館は一時期国務省の管轄下にあったことがあり、そのため国務省文書を探さねばならなかったのだが、それと気付かなかったのがいけなかった。

リスト化の過程で興味深い資料が次々出てきたが、一例を上げると、朝鮮及び満洲の産業、交通、気象、地誌資料等だけに見られた現象だが、日本文の行間に鉛筆書きの英文がぎっしり書き込まれたものが複数あった。CIG・CIAのサインを見付け、書き込み者を特定できた。CIAの前身機関であるCIGがWDC図書館から借り出した時期が一九五〇年、返却したのが二年後と思われることから、朝鮮戦争に関係している可能性が高かった。アメリカにとつて朝鮮・満洲は、日本が長らく支配していたために調査研究ができなかったいわば白地図地域であった。朝鮮戦争の勃発に伴い、早急にこれを埋めるべく活用されたのが日本軍資料で、必要性の高いもの

を借り出し、大急ぎで英訳し作戦立案に利用されたい。情報面において、接収資料を多数持つワシントンの方が東京のマッカーサーより有利になり、彼の解任へとつながったのではないかという仮説がフツと脳裏に浮かんだ。

またトップのスターリンから大佐クラスまでのソ連赤軍将校四千人以上の人事録には目を見張った。関東軍の情報機関が地道に調査し、一九四四年に作成したものが、よくもここまで調べ上げたものである。朝鮮戦争時、大半の将校はまだ現役であったはずだから、ワシントンにとって棚からぼた餅の情報であったに違いない。

一日中、リスト化を頑張っても三十四、五点が精一杯だから、二ヶ月で千七百点にしかならず、まだ三分の一も達していない。こんな調子では何年かかるかわからないから、今度戻って来るときには、市内在住でボランティアをしてくれる日本人の応援を得ることにし、新学期の授業がはじまる日本に急いで帰国した。

三度目のワシントンは、一年の間をおいた九三年三月の一ヶ月間であった。再びワシントンの桜を楽しめたが、今度こそやり終えねばならなかったので、二人の日本人女性に手伝ってもらう一方、日本課のスタッフが最後に退庁する夜八時頃まで作業をさせてもらった。一人だと資料にのめり込み、ついリスト化を忘れてしまうが、第三者だとどんだん作業を進めてくれるから、進捗度が格段に早い。一ヶ月あまりで完了、その直後、出版社から出版助成の科研費が取れそうという連絡が入った。帰国後、ひたすら打ち込みに専念したが、殴り書きの箇所が読みにくく閉口した。自分の字が読めないのである。これでは校正の段階で原資料と照合しなくてはならない。九四年は日本で作業を続けたが、十一月頃、LC日本課から約百点の新資料が見つかったという知らせがきた。出版前にもう一回ワシントンに行き、原資料との照合、追加分の挿入をしたいが、科研費の規定で、九五年三月

末日までに完成本を文部省に提出しなければならない。時間的に微妙であったが、出版社から促され、九五年一月四日にワシントンに向かった。

カナダから吹き込む北風は刺すように痛かった。時差ボケの頭で直ちに作業に取り掛かったが、一月十日に事態が急変した。毎年LCから数千冊の図書が流出し、その一部が古本市場に流れるため、流出防止が喫緊の課題になっていた。この日、クリントン大統領が新LC館長にピリントン氏を任命、即日同氏は部外者の書庫内出入りを一切禁止した。追加分のリスト化は終了していたが、不明箇所の場合は終わっていない。仕方なく資料を書庫から持ってきてもらうことにしたが、記憶を頼りに、何本目の書架で、下から何段目右端にある云々の指示をスタッフにいわねばならない。手間取ることこの上なく、帰国までに幾らも照合できなかった。

明日は帰国という前夜、荷物の整理をしていると、市内の友人から日本が大地震で大変なことになっているという電話、慌ててテレビをつけると、神戸の各地から炎と煙が立ち上っている光景が映し出された。東京は無事らしいとわかり、帰国できそうだと一安心したが、罹災者のことを考えると心穏やかではなかった。帰りの全日空機内では、東京で録画されたニュースが立て続けに放送されていた。

私にとって『米議会図書館所蔵占領接収旧陸海軍資料総目録』の作成は、イラク戦争や阪神大震災等がからんで、強烈な思い出となっている。九五年に目録が刊行されたあと、資料を閲覧する人はほとんどいなかった。その後スタッフの手でLCの分類番号が付されて閲覧可能になったが、閲覧者は少ないらしい。デジタル化が終わり、日本で見ることができれば、利用者も増えるであろう。その意味で、本年は新資料による新しい研究のスタートラインに当たっている。私のような老兵には、全資料に目を通す時間がない。学生諸君に資料の活用を託し、そ

の成果を期待するのみである。

二〇〇〇年になってから、マテイソンビルの屋根裏部屋から五万冊ほどが見つかった。軍事関係は少ないが、WDCの接収資料であることは間違いない。LCの藤代さんが三年かけてリスト化したのが、屋根裏の倉庫に放置するとは鷹揚なアメリカ人らしい。これまで見つかったのは約十万点、あと三十万点がまだどこかにある勘定になる。資料を絶対に捨てない国だから、まだどこかの屋根裏か地下倉庫に眠っているかもしれない。

